

2024鈴鹿サンデーロードレース第3戦 RACE REPORT

■開催概要

■開催概要

- シリーズ名称 : 2024鈴鹿サンデーロードレース第3戦
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)
- 参加台数 : 総参加台数241台
 - CBR250R Dream Cup.....26台
 - CBR250RR Dream Cup.....28台
 - インターJP250.....11台
 - ナショナルJP250.....24台
 - インターJ-GP3.....12台 (内、HRC NSF250R Challenge.....1台)
 - ナショナルJ-GP3.....13台 (内、HRC NSF250R Challenge.....7台)
 - インターST1000.....20台
 - ナショナルST600.....42台
 - ナショナルST1000.....30台
 - インターST600.....16台
 - インターJSB1000.....19台
- 開催日 : 2024年9月14日(土)・15日(日)
- 天候/路面 : (14日) 晴れ一時雨/ウェット→ドライ、(15日) 晴れ/ドライ

★次回レース予定

第60回 NGKスパークプラグ杯 2024鈴鹿サンデーロードレース最終戦

- 開催日 : 2024年11月16日(土)・17日(日)
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)
- 開催クラス : インターJSB1000、インター/ナショナルST1000・J-GP3・ST600・JP250
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット



★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。
https://www.suzukacircuit.jp/result_s/



★レース写真は、バトルファクトリー様のHPで
ご購入いただけます。
<http://www.battle.co.jp/>

デジタルプログラム閲覧数10,000件突破!

今大会では、通常冊子による公式プログラムに加え、デジタルプログラムを初めて運用しました。

9月12日(木)～9月15日(日)の4日間で、10,000PV(ページビュー)を突破いたしました。

ご覧いただきありがとうございました!!

※9月30日(月)まで下記にてご覧いただけます。

https://my.ebook5.net/HML_programme/vrKZbr/



【デジタルプログラムの特徴】

- ・協賛社様の広告などに協賛社様ウェブサイトのリンクを張り付けることができ、閲覧者はクリックでウェブサイトへアクセスすることができます。
- ・ポイントランキング表にもリンクを添付することができ、全体のポイントランキング表が確認できます。
- ・会場に来ることができないお知り合いの方、ご家族の方もスマホで手軽に閲覧できます。

シリーズチャンピオンが決まったカテゴリーもあり、いつも以上に激しいバトルが展開された第3戦

前戦、鈴鹿サンデーロードレース第2戦が開催されたのは5月18日(土)・19日(日)のことで、今回は、ほぼ4ヶ月ぶりのシリーズ開催となる。その長いインターバルには、“コカ・コーラ”鈴鹿8時間耐久ロードレース第45回大会、2024ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>といったレースが開催され、9月14日(土)・15日(日)に鈴鹿サンデーロードレース第3戦が行われる運びとなった。

初日の14日(土)は全カテゴリーの公式予選と「CBR250R Dream Cup」および「CBR250RR Dream Cup」の決勝レースが行われた。この2カテゴリーのレースは今回が今シーズンの最終戦ということで、どちらのカテゴリーでもシリーズチャンピオンを掛けて予選から激しいタイムアタック合戦が展開された。また、激戦が予想された決勝でも抜きつ抜かれつ熱いバトルが披露された。

毎回多くの参戦台数を集めている「ナショナルST600」には今回も全クラス中最多となる42台が参加。予選では各ライダーによる白熱したタイムアタック合戦が繰り広げられた。また、決勝レースでも各ライダーが性能差の少ないマシンを駆り、目まぐるしく順位を入れ替えるバトルが展開された。

その他、「インターJSB1000」「インターST1000」「ナショナルST1000」の決勝では、リッタースーパースポーツならではの迫力あるバトルが披露された。中でも、国際ライセンスホルダーを対象とするインターJSB1000/ST1000は特に注目度が高かったようだ。また、この2つのクラスにダブルエントリーするライダーもいた。

次戦は伝統の「NGKスパークプラグ杯」という大会名称を戴いたシリーズ最終戦。各カテゴリーのシリーズチャンピオンが決まるこの一戦もさらに激しいバトルが繰り広げられるに違いない。是非ご注目いただきたい。



「CBR250R Dream Cup」と「CBR250RR Dream Cup」は今回が2024年シーズンの最終戦だった。どちらもワンメイクならではの接戦に。写真は「CBR250R Dream Cup」の決勝グリッド

2024鈴鹿サンデーロードレース第3戦 レースレポート(1)

■CBR250R Dream Cup

ランキングリーダーの入江高伸が公式予選で2分45秒038をマーク。片口神月が2分44秒810をマークしてそのタイムを上回る。ポールポジションを獲得したのは片口。決勝レースでは2番グリッドスタートの入江が良いクラッチミートを披露してホールショットを奪う。片口がすぐに入江をパスしたが、8番グリッドスタートの秀崎隆がその2台を立て続けにパスして一気にトップに。入江、片口、秀崎のオーダーでオープニングラップを終了すると、その3台が一時的に後続を引き離しにかかる。3周目になるとトップ集団と4番手集団が接続。9番グリッドスタートの林規夫が3周目をトップで終了する。集団はその後何度が順位を入れ替えた末、秀崎がトップチェッカーを受け、逆転でシリーズチャンピオンを決めた。



CBR250R Dream Cup表彰式(優勝:秀崎隆、2位:片口神月、3位:林規夫)

■CBR250RR Dream Cup

公式予選ではまず辻本範行がタイミングボードのトップに。岩月寿樹と的場浩晃が辻本のタイムを上回るが、辻本が2分37秒367をマークして自己ベストを更新。その辻本がポールポジションを獲得すると、決勝レースではオープニングラップから早くも後続を引き離しにかかる。3番グリッドスタートの的場が2番手に。5番グリッドスタートの今井勝也が的場をパス。辻本、今井、的場のオーダーでオープニングラップを終了する。徐々に辻本のテールに接近した的場を含む7台がトップ集団を形成。このレースの直前にCBR250RR Dream Cupで優勝を飾ったばかりの秀崎隆が4周目のヘアピンでトップに立つ。次第に独走状態となった今井が優勝を決めた。チャンピオンに輝いたのは6位でチェッカーを受けた福井宏至だった。



CBR250RR Dream Cup表彰式(優勝:今井勝也、2位:的場浩晃、3位:大倉拓夢)

■インター／ナショナルJ-GP3・HRC NSF250R Challenge

公式予選ではまず富樫虎太郎がタイミングボードのトップに、仲村瑛冬がそのタイムを上回るが、続いて竹本倫太郎、戸高綸太郎が仲村のタイムを上回る。ポールポジションを獲得したのは竹本。決勝レースではその竹本がホールショットを奪う。それに続くのは戸高、富樫。戸高がデグナーカーブで竹本をパスし、オープニングラップをトップで帰ってくる。戸高、竹本、遠藤翔類、保坂洋佑、富樫、仲村、長谷川蒼馬、中嶋昂土、藤井謙汰の9台が集団を形成。3周目には竹本がトップに浮上する。竹本と遠藤が後続を引き離すことに成功。その2台はその後もバトルを続けたが、竹本がトップチェッカーを受けると同時にインターJ-GP3を制した。2位でチェッカーを受けた遠藤がナショナルJ-GP3のウィナーとなった。



インターJ-GP3表彰式(優勝:竹本倫太郎、2位:仲村瑛冬、3位:藤井謙汰)



ナショナルJ-GP3表彰式(優勝:遠藤翔類、2位:戸高綸太郎、3位:長谷川蒼馬)

■インター／ナショナルJP250

直前に雨が降り始め、ウェット宣言が出された公式予選では前田誠司が2番手以降を1秒339引き離す2分38秒295をマーク。決勝レースではポールポジションからスタートした前田が抜群のクラッチミートを披露する。前田はオープニングラップから頭ひとつ抜け出すことに成功。しかし6番グリッドスタートの森山隼が前田に追いつくと、2周目の1コーナー進入で森山が前に。すぐに前田がトップに返り咲く。2周目に福井宏至がトップに浮上。福井、前田、森山を含む9台がトップ集団を形成する。中川涼が3周目をトップで終了。その後もトップ集団はコーナーごとに順位を入れ替えたが、前田がトップチェッカーを受け、ナショナルJP250のウィナーに。インターJP250では3位の中川が3勝目を飾ることとなった。



インターJP250表彰式 (優勝:中川涼、2位:鈴木悠大、3位:船田俊希)



ナショナルJP250表彰式 (優勝:前田誠司、2位:福井宏至、3位:澤合柊)

■ナショナルJP250車両銘柄表彰式



ナショナルJP250車両銘柄表彰式 (Honda賞: 福井宏至、ヤマハ賞: 前田誠司、カワサキ賞: 神吉龍成)

■インター-ST1000

同ポイントでランキングトップ、2番手の山中将基と片平亮輔が公式予選でタイミングボードのワンツーに。2分12秒075をマークした山中が3戦連続のポールポジションを獲得することとなった。決勝レースではその山中が何度かフロントを上げながらもトップで1コーナーへと突入。山中はオープニングラップから後方を引き離しにかかる。それに3番グリッドスタートの安達勝紀、2番グリッドスタートの片平と続いてオープニングラップを終了。安達と片平を立て続けにパスした6番グリッドスタートの中島陽向が2番手に浮上するが、その中島が転倒する。山中は自身がマークしたファステストラップを更新しながら後続を引き離し続け、2位以降に26秒043ものアドバンテージを築いてポールtoウィンを飾った。



インター-ST1000表彰式(優勝:山中将基、2位:安達勝紀、3位:澤村元章)

■ナショナルST1000

公式予選では池田寛之が2分19秒603のベストをマークしてピットイン。池田は再びピットを離れると2分19秒131をマークして自己ベストを更新した。決勝レースではポールポジションスタートの池田の横から3番グリッドスタートの竹中淳雄が伸びていく。竹中がホールショットを奪ったが、池田がオープニングラップのデグナーカーブ一つ目進入でトップに。そのまま池田は集団を抜け出しにかかる。竹中の背後に2番グリッドスタートの永山翔太が接近。永山は3周目に竹中をパスする。池田、永山、竹中はそれぞれ単独状態に。しかし、永山が次第に池田に接近すると、5周目にトップに浮上。池田がすぐにトップに振り返り、池田、中野、永山は終盤までトップ争いを展開。結局、池田が2連勝を飾る結果となった。



ナショナルST1000表彰式(優勝:池田寛之、2位:中野涼真、3位:永山翔太)

2024鈴鹿サンデーロードレース第3戦 レースレポート(7)

■ナショナルST600

土曜日午前最後の公式予選となったこのカテゴリーでは楠留維が唯一の2分16秒台となる2分16秒856をマーク。楠はタイヤ温存のため、すぐにピットに入る。決勝レースではその楠がホールショットをゲット。しかし、2番グリッドスタートの岩本匠生が楠をパスしてトップに。最終シケインの進入で楠が岩本を抜き返し、楠、岩本のオーダーでオープニングラップを終える。ランキングリーダーの富江慧が2周目に転倒。その後も楠と岩本はサイドbyサイドのバトルを繰り広げる。2台の背後に3番グリッドスタートの小野拓也が接近。西コースで雨が降ってきた後もその3台はテールtoノーズのバトルを続ける。小野がファイナルラップで楠をパスしたが、楠が抜き返し、岩本、楠、小野のオーダーでチェッカーを受けた。



ナショナルST600表彰式(優勝:岩本匠生、2位:楠留維、3位:小野拓也)

■インターST600

前回のウィナーである塚原溪介が公式予選のアタック1周目で転倒。2分16秒179をマークした中島元気がポールポジションを獲得する。決勝レースでは2番グリッドスタートの丹羽貴大がホールショットを奪うが、その丹羽が2コーナーでオーバーラン。それにより中島がトップに立つと、頭一つ抜けることに成功する。その背後では3番グリッドスタートの村瀬豊、丹羽、予選の最後でタイムを出し、7番グリッドからのスタートとなった塚原がバトルを展開。その3台が周回ごとに順位を入れ替える間も中島は安定した走りを披露し、単独トップの座を盤石なものにする。その後、塚原と丹羽も単独2番手、単独3番手となる。結局、中島が塚原以降に15秒828ものアドバンテージを築いてトップチェッカーを受けた。



インターST600表彰式(優勝:中島元気、2位:塚原溪介、3位:丹羽貴大)

■インターJSB1000

公式予選最後のアタックとなったこのカテゴリー。高橋直輝と長谷川修大が僅差でタイミングボードのトップの座を争う。唯一の2分10秒台となる2分10秒947をマークした長谷川がポールポジションを獲得した。決勝レースでは長谷川、高橋、羽根巧とグリッドのオーダー通りに1コーナーへと突入。長谷川と高橋が集団を抜け出すと、長谷川は高橋をも引き離すことに成功する。単独3番手を走る羽根の後方では遠藤晃慶と中村敬司がテールtoノーズのバトルを展開。中村が遠藤をパスする。4目目になると高橋が長谷川に接近。しかし、5周目には長谷川が2分11秒944のファステストラップをマークしながら高橋を引き離す。長谷川は再び単独トップとなり、6秒716のアドバンテージを築いて今季初優勝を飾った。



インターJSB1000表彰式(優勝:長谷川修大、2位:高橋直輝、3位:羽根巧)

Voice
of
Pick up
Riders
-SUNDAY EDITION-

この日、キラリと光った
ライダーに一问一答

この日、キラリと光ったライダーに一问一答
「Voice of Pick up Rider -SUNDAY EDITION-」

インターST1000で優勝した

山中 将基 選手

(チーム備前精機 桐本テクノ 南野製作所/Honda CBR1000RR-R)



Q. 公式予選で良いタイムをマークして3戦連続のポールポジションを獲得しましたね。

A. 今年から導入したCBR1000RR-Rには昨年まで乗っていたバイク以上のポテンシャルがあると信じていました。2番手以降に1秒807の差を付けることができましたが、実はミスしました。ミスがなかったらさらに速いタイムが出たので少し悔しいです。

Q. 後続に1秒273の差をつけてオープニングラップを終えると、その後も周回ごとに差を広げ続けましたね。

A. 集団に巻き込まれると大変になることがわかっていたのでオープニングラップから集中して走ろうと思っていました。スタートで後続の選手が横目で見えて少し焦りましたが、ここで引くことはできないと考えて必死で1コーナーに突入しました。ホールショットを奪ってからは思っていたように引き離すことができました。

Q. 次回は最終戦ですね。どのように戦いますか。

A. 今回同様、予選から行けるだけ行こうと思っています。最終戦には他の選手権に参戦しているライダーもスポット参戦してくると思います。そうしたライダーに負けないよう、存在感を示したいです。